

# 短期語学留学プログラムの効果測定 (3)

関 久美子・野中 辰也・隅田 朗彦

## Assessment of a Short-term Study Abroad Program (3)

Kumiko Seki, Tatsuya Nonaka, Akihiko Sumida

### 1. はじめに

新潟青陵大学短期大学部人間総合学科では、その前身である同短期大学国際文化学科において設立された海外短期留学プログラムを引き続き9年間行ってきた。野中・田中・隅田(2001)および野中・隅田・田中(2002)は、設立当初2年間の短期留学プログラムの効果を測定し、以下のように報告している。

- 1) 留学プログラム参加者全体として、留学後のPre-TOEFLテストのスコアは留学前と比較し、著しく伸長している。
- 2) 6ヶ月留学と3ヶ月留学を比較した場合、上記テスト・スコアの上では、全体として6ヶ月留学の伸長が著しい。
- 3) 上記テストのリスニングとリーディングのスコアを比較した場合、リスニング・セクションの伸長がより大きい。

ただし、これらの報告は参加者の総数がまだ少数であったことから、大まかな傾向を把握した程度に留まっていた。

そこで、本稿は参加者の総数がある程度増加した近年の留学派遣生(以下「派遣生」とする)に関する留学前後の英語運用能力の変化を測定し、プログラムの意義を検証することにする。さらに、その効果の有無を踏まえた上で、留学プログラム運営の困難点についても言及したい。

### 2. 短期留学プログラム概要

派遣生の留学先はプログラム設立当初から変化なく、野中ほか(2001)でも留学プログラムを概説しているが、当時と比較し、プログラムの内容は発展している。そのため、一部の重複もあるが、ここでは短期留学プログラムの内容について記述したい。

## 2. 1 Green River Community College 集中英語プログラム

派遣生は本学の姉妹校である米国ワシントン州のGreen River Community College (以下「GRCC」とする)の集中英語プログラムにおいて集中的に英語の学習を行う。週に5日間、授業は午後から50分授業が1回、75分授業が2回行われ、会話、聴解、文法、読解、作文の技能を身につける。1クラスは最大15人程度で、5つのレベル(下から順に、レベル1: Basic、レベル2: Intermediate、レベル3: Hi-intermediate、レベル4: Advanced、レベル5: Academic Preparation)に分かれており、学期開始前のオリエンテーション期間中に行われるプレースメント・テストの結果に基づき、各自の英語力に合わせたレベルにクラス分けされる。GRCCは4学期制で11週間を1学期とし、学期の総合成績が80%以上で次のレベルのクラスへ進級することができる。派遣生はレベル2、ないしはレベル3からスタートすることが多い。

GRCCではアクティビティー・コーディネート・オフィスが設置されており、学校スタッフと学生スタッフ、学生ボランティアで運営されている。新入生オリエンテーション期間中のシアトルトリップや、CORE(キャンプ)、キャンパス内でのハロウィンやインターナショナル・フェアなどのさまざまなパーティー、カナダへのスキー・ツアー、アメリカ国内外への旅行など、年間を通じて多種多様なアクティビティーが計画されており、学生間の交流を積極的に促進している。普段、派遣生は集中英語課程で、自分たちと同じ「外国人」である他の留学生と時間を共にすることが多いが、これらのイベントに参加することによって、ホスト文化の学生、すなわちアメリカ人学生と交流することができる。

## 2. 2 留学滞在期間と滞在先

留学滞在期間は3ヶ月ないしは6ヶ月で、派遣生はいずれかを選択することができる(ただし2年次留学の場合は3ヶ月のみ)。GRCCハウジング・オフィスでは留学中の滞在先の選択肢として、オンキャンパス・ハウジング(学校運営による寮)ハウスシェア、ホームステイなどが用意されているが、本学短期留学プログラムでは、ホームステイをすることを原則としている。これには、日常生活をアメリカの家族と共にすることで、英語運用能力の向上を図ることは無論、それと同時に異文化交流、異文化理解を促進させる目的がある。派遣生はハウジング・オフィスが斡旋するホストファミリー先に滞在する。滞在費を支払うことで、ホストファミリーからは部屋と1日3食の食事、そして諸生活に関するサポートが提供される。また、ホストファミリーの人種や文化背景も多岐に渡り、派遣生は家族の一員としてさまざまな交流を通して、その家族特有の伝統的文化もここで学ぶことができる。

## 3. 短期留学プログラム効果測定の方法

### 3. 1 参加者

2004年度派遣生より、プログラム参加による英語運用能力の変化を測定するテストとしてTOEIC IP(IP = Institutional Program: 特別団体受験制度)を利用している。本研究はTOEICを利用し始めた2004年度から、一番最近にプログラムを修了した2007年度までの4年間における22名(6ヶ月派遣生16名、3ヶ月派遣生6名)の派遣生を調査対象とする。

### 3. 2 TOEIC IP 受験回数と受験時期

プログラムへの参加を希望する派遣候補生は、留学開始2～3ヶ月前に選抜テストとして1回、留

学終了1～2ヶ月後に1回の合計2回は必ずテストを受験する。それ以外の受験については、別途年2回短期大学で一般学生向けのTOEIC IPを任意に受験する。本調査の対象となった派遣生については、留学前後の2回のテストは全員受験しており、3ヶ月派遣生の2名および6ヶ月派遣生の14名は帰国の半年後に、さらに6ヶ月派遣生の5名は9ヵ月後のテストを受験している。

### 3.3 効果分析方法

留学による英語運用能力の変化を検証するため、派遣生全体、6ヶ月派遣生、3ヶ月派遣生の3集団について、留学直前(2～3ヶ月前)・直後(1～2ヶ月後)のTOEICスコアの差を比較した。また、派遣生全体および6ヶ月派遣生については、半年後のTOEICスコアも同時に比較することで、留学で培った英語力が保持されるかを検証した。ただし、3ヶ月派遣生については帰国6ヵ月後以降にTOEICを受験したものが少数だったことから、この点についての量的検証は不可能であった。

派遣生全体22名および6ヶ月派遣生16名についてはTOEICのスコアが正規分布をなすことが確認されたため、留学直前、帰国直後、帰国半年後の3回のスコアの差を分散分析により検証し、3ヵ月留学生6名については留学直前・直後のスコアの差をウィルコクソン順位和検定により検証した。

## 4. 結果と考察

派遣生の3回のTOEIC IPテストの結果は「表1」のとおりである。<sup>1)</sup>

(表1) TOEIC IP スコアの推移

		リスニング			リーディング			総合スコア		
		直前	直後	6ヶ月後	直前	直後	6ヶ月後	直前	直後	6ヶ月後
派遣生 全体 (N=22)	平均点	237.3	314.8	348.1	146.6	181.6	205.9	383.9	496.4	554.1
	最高点	290	400	440	215	235	285	465	625	715
	最低点	175	190	215	95	105	135	320	295	350
	標準偏差	32.04	50.84	56.20	30.65	29.90	47.24	43.85	73.32	90.07
6ヶ月 派遣生 (N=16)	平均点	233.8	327.5	353.2	144.7	185.9	210.7	378.4	513.4	563.9
	最高点	290	400	440	200	235	285	460	625	715
	最低点	175	235	215	110	140	135	320	410	350
	標準偏差	35.20	44.79	57.40	25.71	27.63	48.58	39.64	65.28	91.21
3ヶ月 派遣生 (N=6)	平均点	246.7	280.8	-	151.7	170.0	-	398.3	450.8	-
	最高点	275	335	-	215	205	-	465	520	-
	最低点	215	190	-	95	105	-	330	295	-
	標準偏差	18.41	50.45	-	40.59	32.53	-	50.72	74.13	-

分散分析によれば、「表2」のとおり、派遣生全体および6ヶ月派遣生の3回の総合スコア、リスニング、リーディングの各セクションのスコアすべてにおいて有意差が認められ、多重比較の結果、留学直前と直後に有意差があった。つまり、リスニング力、リーディング力の両者について、留学前と留学後ではスコアが変化しており、また、少なくとも留学後半年間は留学直後の学力が保たれているということになる。

(表2) ANOVA: 留学直前・直後・6か月後のTOEIC IPスコア平均値の差

グループ	カテゴリー	F値
派遣生全体	総合スコア	27.01**
	リスニング・スコア	26.04**
	リーディング・スコア	12.15**
6ヵ月派遣生	総合スコア	29.62**
	リスニング・スコア	27.64**
	リーディング・スコア	13.00**

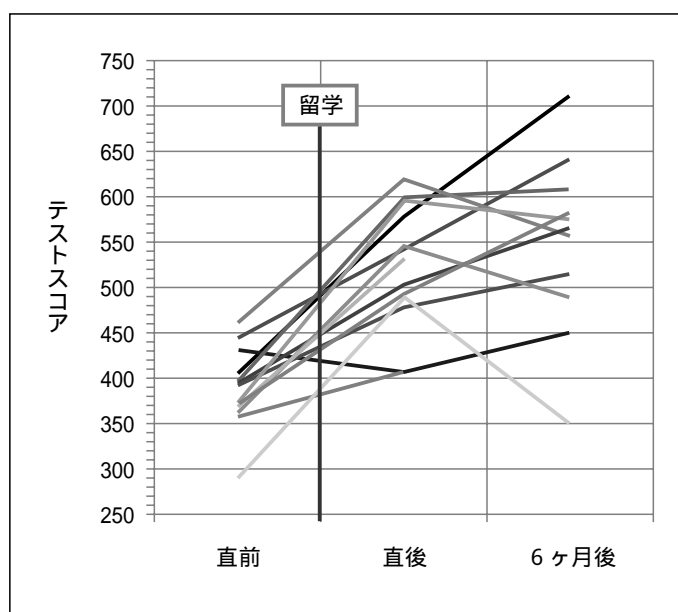
\*\* p &lt; 0.01 / df = 2

さらに、「表1」の平均値から、派遣生の英語運用能力の伸長が見てとられる。総合スコア、リスニング、リーディングの留学直前・直後の平均値の差はそれぞれ +111.2、+77.5、+35.0ポイントであった。特に、6ヵ月派遣生は留学直前と直後の伸長差が著しい(+135.0、+93.8、+41.3)

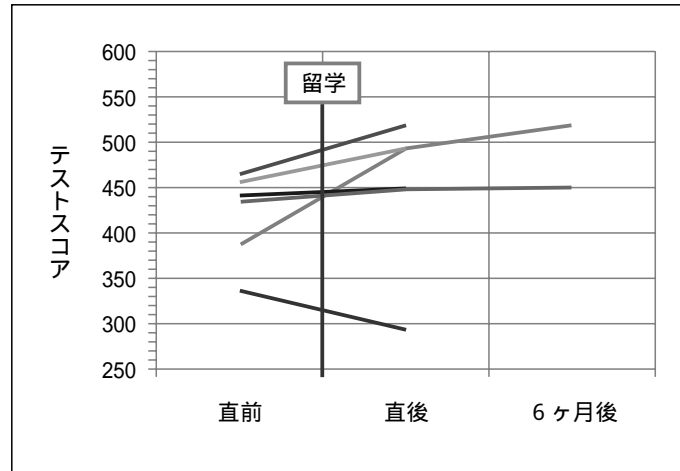
全体として、留学前の平均値はTOEICが設定する基準のDレベルだが、留学後にはCレベルに達していることから、英語力が確実に伸長していることが分かる。また、その後もCレベルは維持されている<sup>2)</sup>。

これに対し、3ヵ月派遣生については、総合スコア、各セクションのスコアともに、直前・直後の有意差は見られず、テスト・スコアから留学によって英語力向上があったとは言い難い。総合、リスニング、リーディングの平均値でそれぞれ、+52.5、+34.2、+18.3ポイントと、ある程度の伸長が見られるものの、伸長率は6ヵ月派遣生ほどではない。また、「図1」「図2」に示されるとおり、個々の派遣生を見た場合、6ヵ月派遣生は多くの派遣生が留学前後でスコアを大幅に伸ばしたのに対し、3ヵ月派遣生はスコアに変化のないあるいは下がった派遣生が多い傾向にある。

(図1) 6ヵ月派遣生の総合スコアの個人別推移

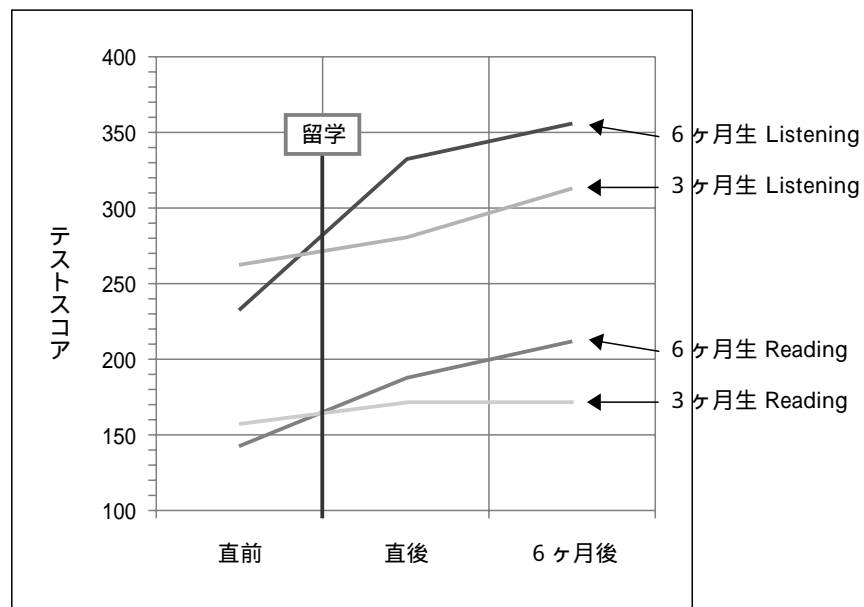


(図2) 3ヵ月派遣生の総合スコアの個人別推移



「表1」に見られるとおり、リスニング・スコアと比較してリーディング・スコアがかなり低い。「図3」にあるとおり、リスニング・セクションの伸長直線と比較してもリーディング・セクションの伸長直線は緩やかになっている。このことから、留学がリスニングおよびそれに付随するスピーキングの能力の伸長には大きな効果があり、学生が期待するいわゆる英会話力は伸びることが推測できるが、6ヶ月派遣生については、TOEICスコアにおいて留学前後の有意差が認められるものの、現状では読解力および文法・語彙力の伸長はリスニング能力の伸長ほどは望めないといえる。留学前からリーディング・セクションのスコアが低いことは、基礎的な語彙・読解力が不足していることを示し、留学前後にもサポートを必要としているといえる。

(図3) リスニング/リーディング平均値の推移



## 5 . 短期留学派遣の意義

6 ヶ月派遣生の留学後の英語力は、留学前と比較し、リスニング、リーディング能力に関して伸長したことがTOEIC IPスコアの推移から判断される。スピーキング・ライティング能力に関しては、数値的にその変化を測定はしていないものの、留学前と後を比較した場合、確実にそれらの能力が伸長していることが見受けられる。

まず、派遣生には、帰国後、1年次前期配当授業である「英語集中演習」に2年生スタッフとして参加し、留学についての発表や1年生の指導、教員の補助をしてもらう。この授業では、準備段階も含めた集中授業の3日間、教員、履修生、2年生スタッフは英語を使用してコミュニケーションをとることが基本となる。派遣生には教員の指示を理解することももちろん、授業運営に関わる質問や報告を英語を使用して積極的にしてくる姿勢が見られる。また、留学の体験発表では、1年生の質問にも臨機応変に答えながら、留学中の出来事から自己の気持ちの変化といった抽象的事柄などを英語で表現するまでに至っており、派遣生の実践的スピーキング能力が向上していることが分かる。

また、帰国後の2年次後期の「スピーチコミュニケーション」という英語スピーチの訓練を行う授業では、「説得のスピーチ」をテーマに、リサーチ結果に基づいてスピーチを作成・発表する。前述のTOEICを使用した効果測定では、語彙・文法能力の大きな伸びは見られなかったものの、他の学生と比較した場合、語彙の量や種類も多く、基本的な文法力は身につけている。また、スピーチ文作成における、物事を客観的・論理的に観察したり、因果関係を構造的に捉え、論理を構造化し、他者に分かりやすく説明するクリティカルシンキング能力は、他学生と比較した場合、圧倒的に高いといえる。

さらに、派遣生（特に6ヶ月派遣生）は公費負担で受験する直後のテスト以降も自己負担でTOEICを受験する傾向が強く、人間総合学科を卒業し、特別推薦入試で幼児教育学科に入学した学生は、幼児教育学科に入ってもなおTOEICを単独で受け続け、英語能力を持続させている。このように、派遣生には留学後も引き続きレベルを持続させることを意識している学生が多い。

加えて、短期留学プログラムに参加した本学卒業生に対して行った略式のインタビューによると、ほぼすべての卒業生が、短大時代、あるいは人生における最も有意義で印象に残る体験として本プログラムを挙げている。また短大全体で実施している「学生満足度調査」の記述欄でも、本プログラムに対するポジティブなコメントも多く、かなりの満足度を得ていることが分かる。本学卒業後に正規留学生として米国に渡米した学生は5名（内1名は海外語学研修終了後、GRCCへ留学）おり、少数ではあるが、新潟という地方都市の短大から米国短大、あるいは米国4年制大学への架け橋として、本プログラムが微力ながら機能しているともいえる。また、再留学までしなくとも、留学後、あるいは本学卒業後に長期休暇などを利用してアメリカに行く者も多い。地方都市の短大を卒業し、地元就職した者の世界観は、どうしても自己の生活範囲内に留まりがちであるが、本プログラムは英語運用能力・異文化理解の向上だけでなく、派遣生の人生観に大きなインパクトを与え、彼らの世界観を一回り広げる役割を果たしていると考えられる。

さらに、2004年度に留学した9名、2005年度に留学した6名、計15名の派遣生を対象に、Matsumoto et al. (2001) が開発したIntercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS-55) を用いて、留学前と留学後の異文化適応力の変化を測定したところ、過半数以上の派遣生の「感情制御力」の向上、そして全体で7割以上の派遣生に異文化適応総合力の向上がみられた。一般的には「異文化 = 外国の文化」と考えがちであるが、多くの異文化コミュニケーション研究者は「異文化」を対人コミュニケーション

ンレベルでとらえる。ここで測定した異文化適応力は、「外国文化」に適応するために特化した能力ではなく、初めて体験する環境にいかに対応することができるかという能力と考えられる。留学を通じて養った異文化適応力は、帰国後、日本の社会で生活していく中でも、就職などに伴う新しい環境に順応し、効果的に機能するという能力として発揮されるであろう(詳細は関(2007)を参照)。

短期留学プログラムを修了し帰国した派遣生に共通して見られる特性として、自立性と自発性があげられる。派遣生は、留学期間中の3ヶ月、ないしは6ヶ月という長期に渡り、日本の家族と離れ、生活全般に関するすべての事柄を自分で決定し行動していかなければならない。また「求めれば助けてくれるが、求めなければ誰も助けてくれない」というアメリカ文化の中で諸問題が発生した場合、必要であれば自発的にサポートを求め問題解決をしていくといった習慣も身につく。これらの体験を通し得られた特性は、帰国後さまざまな場面で役立てられる。特に、就職活動においては、1年次後期日本不在のため、大学からの十分なサポートが受けられない状態であり、半年活動が遅れてしまうのが現状ではあるが、帰国後から積極的に活動を始め、新潟県内だけではなく県外においても企業の自己開拓などを行い、比較的早い段階で就職を決めている者が多い。

## 6. 短期留学プログラムの課題と今後の展開

短期留学プログラムスタート当初と比較すると、ここ数年プログラムに参加する派遣生が減少している。その理由として、留学費用の問題と全体的な英語学習者数の減少が考えられる。まずは留学費用についてである。「表3」は最近4年間の派遣生自身がプログラム参加に際し負担する費用の変動を示している。円・ドル為替レートからも毎年変動が見られるが、アメリカ移民局の移民情報管理料としてのSEVIS費用やオイルサーチャージが増えたことや、GRCCでの施設費やホストファミリー斡旋費値上げにより、本プログラム開始当初よりも費用が増加している。ドルで支払う費用に関しては、前述のように円・ドル為替レートが非常に大きく関与してくるもので、現時点での円高の状態が続けば費用の軽減が見込まれるが、円・ドル為替レートの変動は今後いくらでも起こる可能性があり、これに関しては楽観視ばかりしては行けないのが現状である。

(表3) 2004年度から2007年度までの派遣生負担費用

	3ヶ月留学	6ヶ月留学	
2004年度	584,950円	883,400円	/ \$1=¥110
2005年度	559,290円	939,120円	/ \$1=¥110
2006年度	648,055円	976,650円	/ \$1=¥115
2007年度	692,370円	1,046,620円	/ \$1=¥125

留学先での授業科目を本学の授業単位に読み替えるため、派遣生は留学中の本学へ納入金は通常どおり納入しており、その代わりに本学は派遣生のGRCCでの授業料を全額負担している。これにより、3ヶ月留学では約26万円、6ヶ月留学では約42万円の負担減になり、派遣生にとっては大きな補助となっている。しかし上記のとおり、派遣生の自己負担費用は若干の波があるものの年々増加している。学生からは「お金がないから参加は無理」という声を多く聞いており、また参加の意志を示し選抜試験を受験した後に、保護者との再度の相談の結果、経済的な理由で断念するという学生もいる。20万円台で参加可能な海外語学研修や海外文化研修ですら、費用の問題で参加をあきらめる学生がいる中、

3ヶ月留学で60万円台、6ヶ月留学に至っては100万円台の自己負担が派遣生減少の要因の一つであると考えられる。

次にあげるのは、英語学習者数の減少についてである。国際文化学科から人間総合学科に移行した時点で、英語学習者の数が大幅に減少したが、これは学科の性質上当然といえよう。しかし特に平成19年度の英語分野学生の減少は顕著である。これは、「就職に直結している」と学生が考えるビジネス分野の根強い人気、課題やテストなどが多い英語科目から、より楽な授業を履修するといった学生の気質など、さまざまな理由が考えられる。それらの理由により、学生の分母が減ることで必然的に短期留学プログラムの派遣生が減ることは否めない。学生数の顕著な減少に関しては、一時的なものとも捉えることもできるが、今後その数にどのような増減があるか、慎重に分析していくことが重要である。

一方で、英語分野を選択する学生の数は減少しているものの、人間総合コース全体では英語科目を履修しようとする学生の数は多く（平成19年度は1年前期で108名）、数年間減少していない。したがって、今後、英語以外の専門分野を選び、英語は追加科目として必要な分だけ勉強するという人間総合コース学生が増加することも考えられる。つまり、自分分野以外の学生の指導がより大きなウエイトを占めることになる可能性もある。このような可能性にも十分に対処する必要がある。

例えば、本学から4年制大学への3年次編入学を志望する学生の数は、分野に関わらず増加している。しかし、一般編入試験では「外国語（主に英語）」が課される場合が多く、その成績が合否の大きな要素となっている。したがって、学生が編入学を目指す場合には、英語が試験科目に含まれていても敬遠せず、志望にあった自由な学部選びができるように英語力の拡充を狙いたい。英語分野学生には本学で学んだことを生かし、外国語学部などを目指してもらいたいところではあるが、例年の学生の志望状況から鑑みると、専門科目としてではなく、一般科目として英語で不利を被らない程度の英語力をつけて送り出すことが先決課題だと考える。

短期留学プログラムは英語力の向上と国際理解を深めることを目的とし人間総合学科に設置されているが、その性質から対象を英語分野の学生のみとしていた。しかし平成20年度より対象枠をすべての分野の学生とし、特定の基準を満たすことで本プログラム参加を認めることとした。対象枠を広げることで、多くの学生に語学力と国際感覚を養う機会を平等に提供することができ、ひいては、本プログラムが短期大学部の特色ある学びの機会として周知されることを期待する。

最後に、短期留学プログラムは内容も充実しており、参加した学生からも高い満足度を得ているにも関わらず、それらを効果的に広報に活用できていないのが現状である。入学者募集のパンフレットでも紹介はされているが、紙数の制約上、残念ながらその内容を十分に伝えきれていない。これらのことから、独自のフライヤーを制作し、パンフレットに差し込んだり、各所で配布したりするなどして、プログラムの魅力を積極的にアピールしていくことを検討中である。また、現在、暫定的に英語分野ホームページを開設し、短期留学および語学研修プログラムのレポートを紹介しているが、今後はブログなどを本格的に運用し、同分野から随時情報を外部に対して発信していくことも大いに必要である。



**注**

- 1) 派遣生全体および6ヵ月派遣生の留学6か月後のテスト・スコアについては、テスト受験が任意であり、それぞれの人数はN=16、およびN=14であった。3ヵ月派遣生は6か月後のテストを受験した参加者が2名だったため、平均値を出さず半年後の効果についての分析も行わなかった。
- 2) TOEICを開発するETS (Educational Testing Service) が作成したProficiency Scaleによる英語運用能力の分類に基づく。Dレベル (220-470点) は「通常会話で最低限のコミュニケーションができる」、Cレベル (470-730点) は「日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる」レベルを指す。詳細については以下を参照。 <http://www.toeic.or.jp/toeic/pdf/data/proficiency.pdf>

**引用文献**

- Matsumoto, D., LeRoux, J., Ratzlaff, C., Tatani, H., Uchida, H., Kim, C., & Araki, S. (2001) Development and validation of a measure of intercultural adjustment potential in Japanese sojourners: the Intercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS) *International Journal of Intercultural Relations*, 25, 483-510.
- 野中辰也・田中ゆき子・隅田朗彦 (2001) 短期語学留学プログラムの測定 (1) 『新潟青陵女子短期大学研究報告』第31号, 71-78.
- 野中辰也・隅田朗彦・田中ゆき子 (2002) 短期語学留学プログラムの測定 (2) 『新潟青陵女子短期大学研究報告』第32号, 33-38.
- 関久美子 (2007) 短期留学プログラム派遣生の異文化適応力 『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第37号, 83-92.

**付記**

執筆は、関がGRCCの概要、短期留学派遣の意義と今後の課題、野中が効果測定、隅田が序論及び効果測定の考察を担当した。

